朝日新聞　2011年5月1日　朝刊　9面

不公平避けて国民を守れ

加藤　陽子（かとう　ようこ）さん（50）　東大教授

「これは戦争だ」との表現も見られた今回の危機にあって、国家がなすべきことは何なのかが改めて問われたと感じた。

かつて震災や集中豪雨に見舞われた地域の市町村長らの行動は見事だった。迅速に集団避難の受け入れを表明し、実行した。共同体への帰属意識に配慮した首長らの手際と胆力には、多くの人々が喝采を送ったろう。

一方で、原子力災害対策特別措置法に基づき、国から避難、屋内退避、計画的避難、緊急時避難準備等の区域に突然指定された人々の、辛苦と困惑と絶望は想像にあまりある。国が発動した同法はその目的として、原子力災害から国民の生命、身体及び財産を保護するため、と謳う。累積放射線量を考慮し、国が住民を避難させたこと自体は正しい。

だがその際、避難できない人々、あるいは避難を是としない人々、避難先から帰宅を求める人々の「生命、身体及び財産の保護」につき、国家は細心かつ周到な配慮を全力で行うべきではなかったか。郵便や物資や燃料の搬入を止めてはならなかった。国家の役割の一つに安全保障の主体としてのそれがある。

だが同時に国家とは、民が私的領域で行った選択の差異により、公的領域で受けるサービスに不公平が生じないよう、全力で国民を守らなければならない主体でもあるはずだ。

専門は日本近代史。主な著書に「それでも、日本人は『戦争』を選んだ」「戦争の論理」「戦争を読む」など。

写真・杉本康弘、山本裕之、河合博司、内田光

※朝日新聞社の許可を得て掲載しております。
無断で転載・複写することを禁じます。